

長野県立歴史館たより

2022年 秋号 vol.112

特集

秋季企画展

諏訪と 武田氏





はじめに

今年は諏訪大社上社・下社において7年に1度の式年造営御柱祭が開催されました。新型コロナウイルスが猛威を振るう中、神社や地域のみなさんの工夫と努力により、無事各社に御柱が立ちました。例年県内外から注目される諏訪の御柱祭ですが、今年はひと際、人々の記憶に残るものになったのではないのでしょうか。

もともと諏訪の神がみとは水や風、石や木を司る自然の神がみであったと考えられています。その後、諏訪の神がみは神話と結びつき、上社はたけみ なかたのみこと やさかと めのみこと 建御名方命、下社は八坂刀売命を祭神として現在に至っています。

諏訪社には「諏訪明神の依り代」である大祝と呼ばれる役職がありました。上社では諏訪氏が代々この役職を務め、「現人神」として信仰の中心となる立場でした。大祝となる儀式は、諏訪明神だけでなく、元来諏訪で祀られていた神がみとも一体化するものだったようです。神話由来の外来の神を祭神としながら、土着の神も排除せず融合していったところに諏訪信仰の特色があります。

中世以降の諏訪と武田氏



鉄鐸（諏訪大社上社蔵）

中先代の乱以降、それまで神職と領主を兼ねていた諏訪氏は、神職を司る大祝家と実質的な領主である惣領家に分裂します。しかし、宗教的な力だけでなく、実質的な諏訪の支配権力を得ようとした大祝家の諏訪継満は、下社の金刺氏や高遠諏訪氏を味方につけ、惣領家を滅ぼします。

その後、惣領家の生き残りである頼満は、金刺氏を甲斐（現在の山梨県）に追放し、高遠諏訪氏も屈服させるなど、積極的に領土拡大を目指し、「諏訪氏中興の祖」と呼ばれるようになりました。

その過程で大祝家を助けた甲斐の武田氏とも争うようになり、1528（享禄元）年には武田信虎と堺川（現在の長野県富士見町）で激突、兵力に勝る武田軍を息子の頼隆とともに破ったことが、御渡注進状（諏訪市博物館蔵）などに記されています。この戦のあと両氏は和睦するのですが、この時に神職である神長が和睦の証として鉄鐸（御宝鈴）を鳴らしたとされています。本企画展では諏訪社の神事や契約の際に打ち鳴らされた諏訪大社上社の鉄鐸（複製）や矢彦神社の鐸鉦（さなぎほこ）を展示します。神がみへの祈りや誓いを込めて使われた宝物をぜひご覧ください。

武田氏の諏訪支配と信仰

境川の戦い以降、当主頼重は武田信虎の娘を妻に迎えて武田氏と結びつきを強めますが、信玄が武田家を継ぐと、関係は一変します。信玄は諏訪へ侵攻、諏訪頼重を滅ぼし、高遠諏訪氏も屈服させます。武田氏が信濃侵攻にあたってこれほど諏訪にこだわったのはなぜでしょうか。

現在、諏訪の御柱祭というと「諏訪地方の祭」というとらえ方が



孫子の旗・諏訪神号旗（雲峰寺蔵）

一般的ですが、古来より諏訪社の神事には信濃全域の住民や武士が関わっていました。祭事への人足や費用などの情報が諏訪へ集まっていたのです。下社春宮造宮帳（諏訪市博物館蔵）には、信濃各地へ出された1578～1579（天正6～7）年春宮造営のための代官や負担額の割り当てが記されています。当時の戦いは情報が命。信濃全域へと領土を拡大したい武田氏にとって諏訪に集まる各地の情報は大変貴重なものであったことが想像できます。信玄は諏訪へ侵攻する際に、100年ほど滞っていた諏訪社の御頭役（諏訪大社の祭事について割り振られた仕事）を復活させることを大義名分としました。また、諏訪氏の血を引く息子の勝頼に諏訪の名跡を継がせ、諏訪社の神職である守矢氏の跡継ぎに晴信の一字を与えるなど、諏訪の神事に介入していきました。

さらに、中世以降諏訪明神は戦の神として武士から篤い信仰を集めていました。諏訪＝武田の守護神とすることで、味方の士気を高めるとともに信濃の武士へのアピールにもなっていたと考えられます。武田氏の旗として有名な「孫子（風林火山）の旗」とともに、「諏訪神号旗」や信玄の兜に付けられていたと伝わる「諏訪明神像」（ともに雲峰寺蔵）からは戦における信玄と諏訪の結びつきを垣間見ることができます。このように、信濃へ侵攻し支配するためには、諏訪を押さえることが最優先事項だったわけです。

信玄は1573（天正元）年に没し、子の勝頼が跡を継ぎました。勝頼は辰野町宮木の諏訪神社を再興したり、塩尻市小野の小野神社へ「神勝頼」（神は諏訪上社の氏子であることを示



梵鐘（小野神社蔵）

す姓）の名で梵鐘を寄進したりするなど、諏訪の代表として諏訪社への関わりを続けますが、1582（天正10）年、織田・徳川との戦いに敗れ、武田氏は滅亡します。

その後の諏訪と武田氏



諏訪法性兜
（諏訪湖博物館・赤彦記念館蔵）

江戸時代以降も諏訪と武田氏のつながりは脈々と語り継がれていきました。上杉謙信と争った川中島の戦いは錦絵や屏風に描かれ、多くの作品で諏訪神号旗が見られます。また、信玄が使用したと伝えられている諏訪法性兜は、浄瑠璃や歌舞伎の演目「本朝廿四孝」において重要なアイテムとして登場します。

おわりに

この企画展は、中世諏訪氏が統治し、諏訪社によって信濃国一帯に影響力を持っていた諏訪地域について、信玄や自らを諏訪氏の後継者と意識していた勝頼の諏訪支配と諏訪信仰について展示します。武田氏の権力も利用しながら、信仰とともに発展してきた諏訪地域と、信仰心に篤いだけでなく神や仏の存在を巧みに利用しながら統治を進めていった武田氏とのかかわりについて知ること、中世における諏訪についてみなさんにあらためて考えていただける機会となれば幸いです。

（内城正登）



『陣中日誌』 れんたい 歩兵五十聯隊速射砲中隊



陣中日誌 (当館蔵)

『陣中日誌』と題されたこの資料(上写真)は、陸軍松本歩兵第五十聯隊の速射砲中隊が残した、1937(昭和12)年8月15日の動員から、39年12月28日に帰還し翌40年1月8日復員完結に至るまでの、日中戦争の華北戦線に関する記録です。中国開封での戦闘(38(昭和13)年6月)など、進軍の様子や戦闘要図が詳細に記されるとともに、日中開戦直後という時代状況の中、盧溝橋を渡った際(37(昭和12)年9月14日)の「所見」など、記録した兵士の所感も記されています。

これは戦時中、松本歩兵第五十聯隊歩兵砲隊に所属し、開封・懷慶などへ赴き復員した故町田守衛氏が、戦後保管していた史料群(「町田守衛資料」)の内の一つとして、2022(令和4)年3月に寄贈されました。史料群によれば町田氏は、曹長として下士官以下の人事や中隊将校以下の功績に関わる業務を担い、戦闘詳報や日誌の管理に当たっていました。また戦後は、同聯隊戦友会の事務局として会員(旧隊員、その配偶者・遺族)への会合等の連絡・案内役を務めていました。

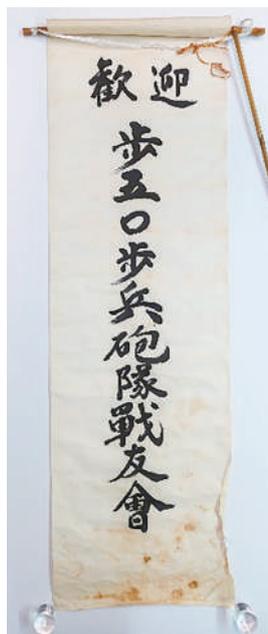
史料群には、この『陣中日誌』はじめ、従軍中の各戦闘の概要、戦闘要図等を印刷・集成した報告書としての「戦闘詳報要報綴」など松本歩兵第五十聯隊の活動内容を具体的に伝える史料や、戦後の戦友会の記念誌、会合や団体旅行の際使われたと思われる流れ旗(右写真)も含まれています。

この『陣中日誌』は、直筆ではなく、ガリ版刷りであることから、戦地での記録をもとに報告書として複写整理されたものである可能性もありますが、他の綴られた資料と比較して、表紙の文字は掠れ、表紙に張られた布は燃れてしまっています。ここからは、この綴りが度たび紐解かれ、閲覧させていただくことが伺えます。町田氏自身や戦友会の人びとの間で思い出の縁として読まれていたのでしょうか。日誌中、任務を終えて帰還した直後の1940(昭和15)年1月1日の記録には、

一、茲ニ光輝アル紀元二千六百年ノ元朝ヲ迎フ。輝日ヲ拝シ胸迫ルモノハ遠キ大陸ノ幾山河假寝ノ宿ノ年ノ瀬ヲ忍ビ感慨無量ナリ。(中略)吾人今日生キテ今朝ノ栄光ニ浴セシ喜ハ何ヲ以テカ東亜新秩序建設ノ礎石トシテ不帰タル士ノ悲シミヲ遣ラン。

と、記念の年の元旦を迎え、生きて復員できた喜びと共に、「東亜新秩序建設」のために命を落とした亡き戦友を偲ぶ記述も見いだせます。

この華北戦線の最中、1937(昭和12)年10月に松本五十聯隊を母胎として第百五十聯隊が臨時編成され、太平洋戦争ではその第二次隊が、トラック島・テニアン島で悲劇的な最期を迎えることとなります。戦前・戦中は、信州の郷土部隊として親しみと尊敬を集めた松本五十聯隊への視線も、戦後には一変してしまうわけですが、残された『陣中日誌』や戦友会の流れ旗を見ると、戦前から戦後を闘い生きてきた人々にとっては、戦中と戦後は地続きにあり繋がっていたことに気付かされます。(鈴木実)



流れ旗 (当館蔵)

考古資料をよむ

考古学からみた英雄時代

— 「外来」という意味 —



英雄時代

英雄時代という浪漫的な響きのある名称は、現在では聞くことはないですが、戦後の著名な歴史家である石母田正が本格的に論じたものです。

英雄時代とは、古事記・日本書紀に記載された神武天皇の東征、ヤマトタケルの征服といった自らが民衆の先頭に立つ英雄的個人が登場する時代のことです。古代国家が成立する過程において普遍的に存在するものとされました。

英雄時代と考古学

ヤマトタケルのような英雄物語が史実かどうかは別として、古代国家成立への胎動が起きる古墳時代には英雄を思わせる出土品がみられます。

例えば当館で展示している飯田市 妙前大塚古墳（妙前3号古墳）出土品をもとに再現した古墳時代人は、王みずからが甲冑を身にまとい武器を手にした姿をしています。多量の金属製武器が副葬されることは、古墳時代前半期の古墳に多くみられ、物資獲得や水利を優位に進めるために英雄が求められたようです。



武装した古墳時代人
(当館常設展示)

この英雄は、武功をあげることによって求心力を得た武人であることに注目しなくてはなりません。英雄の姿の裏には、征討されたものたちがいるということです。討伐すべき敵を定めることによって、内なる民衆からの求心力を得たのです。守る「内」と、倒す

「外」を民衆に示すことで英雄になることができたのです。

「外来」という意味

考古学の解説では「この資料は〇〇地方に起源をもつもの」といった外来文物に注目することが多くあります。これは型式学という資料自体の形態・文様の変遷から導き出したもので、当時の人々が外来をどのように認識したかは別の問題です。今でも外国製と意識せずに使っているものがある一方で、海外ブランドなど外国製であることが強調されるものもあります。

「外」という認識は非常に恣意的です。「外」への憧憬であったり、反対に英雄たちのようにあえて「外」敵を作り出したりもします。展示で多く登場する外来文物をご覧になった際には、当時の人びとは外からのものをどのように見ていたのか、思いを馳せてみていただきたいと思います。

(石丸敦史)



出川南遺跡出土土器（松本市立考古博物館所蔵）

三河地域に由来し、弘法山古墳築造の一翼を担った人々のものとされています。故郷を離れてやってきた彼らを松本盆地の人々はどうのように見ていたのでしょうか。



木曾義仲合戦図屏風（当館蔵）

木曾義仲は江戸時代までは「平家物語」にみえる素朴な人柄が愛され、はかない最期にも共感が持たれていました。木曾から上洛して平家を都から追い出したが、源義経軍によって追い詰められていく劇的なドラマもまた、江戸時代の物語で関心が寄せられていきます。

このような理由から義仲のファンも多く松尾芭蕉は、義仲の生涯に深い関心を寄せ、その遺跡を訪ね歩いたことは有名な話です。

当館で今年の新しい義仲の合戦図屏風を購入しました。「長谷川信秋筆 源平合戦図」です。「平家物語」の「木曾願書」「篠原合戦」「首洗い（実盛の最期）」を描く大屏風。江戸時代に描かれた義仲合戦図屏風としては全国6番目になります。

木曾願書は義仲唯一の手書（秘書官、右筆）であった覚明が、埴生護国八幡宮（富山県小矢部市）で義仲が戦勝祈願するため、願文を作成し、読み上げている場面です。続いて、義仲は平家方と篠原（石川県加賀市）で戦います。このとき平家方の武将として参戦していたのが斎藤別当実盛。実盛は武蔵国の武士で、義仲の父義賢が大蔵合戦で殺害された際に、幼少だった義仲（駒王丸）をひそかに逃したいわば命の恩人です。このとき既に老齢で、それを悟られまいとして髪を黒く染めて

陣しています。対する義仲方は手塚別当光盛。実盛と組んず解れず組み合いをしています。

画面下方に描かれているのが「首洗い」の場面。実盛の首実検をする際に、義仲は「もしこれが実盛ならば白髪でなければならないが」と不審を抱きます。実盛と武蔵国で親しんでいた樋口兼光の口から、実盛が白髪を染めて出陣していたことが明かされます。実際に首を洗ってみたところ髪が白くなり、実盛であったことが確かめられました。

義仲の大鎧やきらびやかな甲冑、情感あふれる表情など、丁寧に描かれた屏風です。問題となる長谷川信秋ですが、長谷川信春（長谷川等伯）を祖とする長谷川派の絵師として知られますが作例はあまり知られません。

松尾芭蕉が生前、実盛の首を洗った首洗い池を訪れ、多太神社を参詣します。義仲が奉納したという実盛着用の兜の前で詠んだ句。

むざんやな 甲の下の きりぎりす

なんといたわしいことだろう。実盛が着用していたという兜の下には、今ではキリギリスが鳴いている（戦いのことも忘れ去られている）ことよ、と歌ったのです。なお江戸時代多太神社には実盛の亡霊が出現したといひます。謡曲「実盛」はその鎮魂のために制作されました。（村石正行）

高遠藩の遺産 —最後の藩主が残したもの—

会期▶令和5年1月14日(土)~2月26日(日)



今年度の冬季企画展で取り上げるのは幕末の高遠藩です。長く続くコロナ禍によって希薄な人間関係が当たり前になりつつある今だからこそ、人と人との絆やつながりが生み出した奇跡を広くご紹介できたらと思います。

江戸時代、高遠藩では保科家に続き鳥居家による統治が行われた後、1691(元禄4)年に内藤清枚きよかざが入封し、以後180余年にわたり内藤家による統治が続きました。1868(慶応3)年12月、王政復古の号令によって江戸幕府の廃止が宣言されると、新しい時代へ向けての大きな変動期に突入していきます。高遠藩では、1869(明治2)年に版籍奉還が行われましたが、それを実施したのが、高遠藩最後の藩主である内藤頼直よりなおでした。その後、頼直は新しく藩知事となりましたが、1871(明治4)年には高遠藩が高遠県となり、更に、高遠県は筑摩県に編入されたため、頼直は知事の任を解かれ上京を命じられます。高遠城は廃城となり城内の建物等は民間に払い下げとなったのですが、頼直は城を引き渡す前に、領内の神社への武具の奉納、村役人の家への道具類の下賜を繰り返します。財政難にあった内藤家への献金と引き替えの武具奉納、道具類の下賜であり、元領民による経済的な支援にすぎないとも考えられますが、150年ほど経った現在でもほとんどが「お殿様にいただいた拝領品」として大切に受け継がれています。



高遠城下眺望図(長野県立歴史館蔵)

そのひとつが宮田村みやたむら個人蔵の厩うまや稲荷いなりとその奉納品類です。厩稲荷はもともと高遠城内にあった神社でしたが、藩の御厩小頭であった小田切伊左衛門に下賜されたことがわかっています。このお宅では、「お殿様にいただいた拝領品」とであると同時に神聖なる「ご神体」として、代々信仰の対象とし大切に守り続けてきました。

頼直が高遠を後にして上京する際には、600人

もの人びとが残雪の道を御堂垣外(伊那市高遠町)まで見送りに出たといひ、頼直も維新後の高遠の人びとの行く末を気にかけていたといひます。また明治の最初には、旧藩士による藩を慕う会、兜城士会が230人あまりで結成され、毎年東京の内藤家へ代表者による年賀参上が続けられたといひます。頼直と人びとと間にあったのは単なる献金のやりとりだけではなく、純粋な絆やつながりが存在しており、それによって多くの拝領品が今日まで伝えられていると考えます。



進徳館(伊那市高遠町)

頼直と人びととの絆が生み出したものとしてもう一つ注目したいのが、1860(万延元)年に創設された藩校、進徳館です。開校していた期間はわずか13年間あまりですが、かつて郡代を務めた阪本天山さかもとてんざんから続く高遠伝統の実学を基本として儒学にもとづく教育が行われました。昌平坂学問所に学び進徳館開校に大きく貢献した中村元起や後に筑摩県の教員養成に関わり新教育の先頭に立った高橋白山たかはしはくさんなどが教鞭をとり、後に東京音楽学校(現東京藝術大学)初代校長となった伊沢修二ら著名な人材を生み出しました。頼直は進徳館の開校式に臨み「儒学の本意を失わず、実学専一に心掛けること」と申し伝えたといひます。その期待にこたえてか、通学生の人数は他藩の藩校に比べ圧倒的に多く、その後教師となり信州教育の基礎を築いた人物も少なくありません。

現在、高遠が大好きな子供達が通う高遠小学校には、前内藤家当主であった内藤頼博よりひろ氏の言葉「清らかで うつくしく やさしく たくましい 高遠の子らに幸あれ」が彫られた石碑があり、子供達を見守っています。

この冬、高遠藩における人と人との絆やつながりに触れ、春には圧巻の桜を見に伊那市高遠町に足をのばして頂ければと思います。

(河野智枝)

INFORMATION

インフォメーション

■2022(令和4)年 9月～2023(令和5)年 1月の行事予定

9月

休館日
5・15
20・26

※9月5日(月)～9月15日(木)は
全館くん蒸のため休館となります。



講座・イベント

古文書講座

初級	A	第4回	9月4日(日)
	B	第4回	9月22日(木)
中級	A	第4回	9月3日(土)
	B	第4回	9月22日(木)
上級		第5回	9月24日(土)

県立歴史館の信州学出前講座①

信州学講座in諏訪 9月17日(土)

考古学講座

第4回 9月24日(土)

10月

休館日
3・11
17・24
31

秋季企画展

諏訪と武田氏

10月8日(土)～11月20日(日)

■10月15日(土) 13:30～15:00

講演「武田氏と諏訪信仰」

講師 笹本 正治

(長野県立歴史館特別館長)

■11月12日(土) 13:30～15:00

講演

「中先代の乱と諏訪信仰について」

講師 二本松 康宏 氏

(静岡文化芸術大学教授)

※講演会は事前申込制 定員80名

■小展示室

「宮坂武男」

～諏訪と武田氏に関する
城郭鳥瞰図

■企画展示室横廊下

「諏訪地域と武田氏関連神社
仏閣写真展」

古文書講座

初級	A	第5回	10月2日(日)
	B	第5回	10月6日(木)
中級	A	第5回	10月1日(土)
	B	第5回	10月6日(木)

古文書フォローアップ講座

上・中級			10月29日(土)
初級			10月30日(日)

古文書探訪会

10月13日(木)

県立歴史館の信州学出前講座②

信州学講座in箕輪 10月22日(土)

11月

休館日
4・7
14・21
24・28

開館記念日

(森将軍塚まつり)

11月3日(木祝)

考古学講座

第5回 11月5日(土)

特設考古学講座①

11月26日(土)

県立歴史館の信州学出前講座③

信州学講座in大桑 11月19日(土)

クリスマスリース作り

11月26日(土)

12月

休館日
5・12
19・26
28～1/3



近世史セミナー

12月3日(土)

特設考古学講座②

12月24日(土)

1月

休館日
～1/3
10・16
23・30

冬季企画展

高遠藩の遺産

—最後の藩主が残したもの—

1月14日(土)～2月26日(日)

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、講座・イベント等につきましては、状況により急遽中止とさせていただきます。ご了承ください。

表紙写真の解説

しんしゅうかわななかしまかつせんにしきえ けん

信州川中島合戦錦絵 乾(当館蔵)

江戸時代に描かれた川中島の合戦を描いた錦絵の折本です。中央に諏訪法性(すわのほうせい)を身に着けた武田信玄、その周りには家臣団とたくさんの旗が描かれています。左上には諏訪神号旗が見えます。諏訪と武田氏のつながりは、後世の美術作品の中でも語り継がれているのです。

行事アルバム

***** 信州学講座 *****



5月7日、笹本特別

館長の「鉄鐙と諏訪

信仰～人と神をつな

ぐ音～」を封切りに

6月4日に長野県埋蔵

文化財センターの柳

澤亮氏による「幻の

長沼城を掘る」、7月2日に当館総合情報課の柴田

洋孝による「古代信濃の仏教信仰～お寺と集落～」

と「県立歴史館の信州学講座」が始まりました。

「信州学」の主な目的は足元の歴史をしっかりと学

ぶことで自らを客観的に見つめ直し、未来を創造す

る原動力にすることにあります。毎回盛りだくさん

の内容で3月までにあと3回予定しています。ぜひ

ご参加ください。

***** グーライトの日 *****



グーライト様との

共同企画として実施

されました。歴史館

特別企画としては、

来館された方の観覧

料を無料として、武

田晴信書状～川中島

の合戦より～を初公開し、またバックヤード施設案

内やプラ板づくり、解説ボランティアによる展示解

説、所蔵品展などの企画を開催しました。先着100

名様には当館オリジナルバッジもプレゼントしまし

た。バックヤードでは普段触れられない縄文・弥生

土器に触れてみるなど盛況に終わりました。

***** 古文書講座 *****



今年度の古文書講座も初級・中級・上級講座を開

講しており、受講者の皆さんは事前に予習をして熱

心に学習をしています。古文書の字の形や音の響

き、身近な史料、時代背景、他の参加者の発表など

参加者それぞれが様々な楽しみ方で古文書と向き合

っている様子が伺えます。来年3月にはティーンズ

古文書講座も予定しています。

長野県立歴史館たより 秋号 vol.112

2022(令和4)年9月1日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6

電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996

E-mail: rekishikan@pref.nagano.lg.jp

ホームページ: <https://www.npmh.net/>

印刷 奥山印刷工業株式会社